

今回の内容

①会議情報、②ワンポイント・アドバイス、③コラム（松岡委員長代理）

会議情報

最近の、消費者安全調査委員会での議論についてお知らせします。

第11回消費者安全調査委員会（平成25年8月9日）

- エレベーター事故
エレベーター事故の評価結果の取りまとめを審議しました。
消費者安全調査委員会では、国土交通省が行った調査結果について、消費者安全の視点から、エレベーターが幅広い年齢層の利用者に様々な方法で利用されていることを踏まえ、直接の原因であるエレベーター本体の問題のみならず、背景的要因まで含め、さらには、万が一、事故が起きてしまった場合の「被害の重篤化を防ぐ」といった視点も含め、幅広い問題意識をもって検証を行いました。
今回の評価結果に盛り込まれた重要な点について、今後、調査委員会自らが調査を行い、更なる検証を進めたいと思っています。
評価結果については、消費者庁のホームページでご覧いただけます。
<http://www.caa.go.jp/csic/action/index5.html>
- 今後の調査案件の候補について
今後の調査案件の候補について議論を行い、今後、関係する専門委員等からアドバイスをいただきながら、事務局で更に情報収集を行うことになりました。
- 一般の方からいただいた「申出」事案
事務局から、類似事例、制度等の関連情報や専門委員の見解などの情報収集の結果が報告され、その内容に基づき調査委員会で検討した結果、1件については調査を行わないことになりました。残りの案件（36件）については、引き続き、臨時委員、専門委員等の知見も活用しながら、事務局で丁寧に情報収集を行った上で調査委員会において判断していくこととなります。

部会の動き

- 食品・化学・医学等事故調査部会
第2回会合が7月下旬に開催され、調査等の対象とすべき事案について、活発な議論がなされました。

☆ボツリヌス菌による食中毒

★ボツリヌス食中毒は、ボツリヌス菌が作り出す毒素を含む食品を摂取することで発症し、物が二重に見えたり、手足に力が入りにくくなる等の神経マヒ性の中毒症状が起きるものです。放置すると呼吸困難などを起こし命にもかかわる重い中毒となることから「最強の自然毒素」と言われています。

★ボツリヌス菌の特徴

ボツリヌス菌は土壌や水などに広く存在しています。原料となる果物や野菜についた菌が低酸素状態におかれることで毒素が産生されます。菌は熱にとっても強く、100℃程度では長時間加熱しても殺菌できません。

★ボツリヌス食中毒の原因食品と対策

過去に原因となった食品の多くは、保存食品や発酵食品で、日本では「いずし」、野菜や魚介加工品の缶詰、瓶詰、真空パック詰め食品（容器包装詰低酸性食品）などです。

原因となるボツリヌス菌は土壌などに広く分布しているため、食品原材料の汚染を防止することは困難です。したがって、予防には、食品中での菌の増殖を抑制することが重要となります。

〈表面 表示例〉



★消費者が気をつけること

真空パック食品だからといって、常温保存可能のレトルトパウチ食品とは限りません。「要冷蔵」表示のあるものは、必ず購入から消費するまで冷蔵保存してください。また、膨張や異臭のある場合は菌が増殖している可能性があるため絶対に食べないでください。ボツリヌス菌が作り出す毒素は加熱により毒性を失うため、食べる前に十分な加熱をすることも大切な予防策です。

※食品によっては、レトルトパウチできない食品や加熱することで食味が変わってしまう食品もあります。取扱や保存方法は表示をよく読みましょう。

〈裏面 表示例〉

名称	〇〇〇〇
原材料	△△△△、×××、□□□、☆☆☆☆、・・・
内容量	100グラム
賞味期限	20XX.X.X
保存方法	10℃以下で保存してください
製造者	株式会社△△食品 東京都〇〇市〇〇

(参考)

○「真空パック詰食品（容器包装詰低酸性食品）のボツリヌス食中毒対策」のホームページ（厚生労働省）
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/shokuhin/syokuchu/03-4.html



(注) この参考情報は申出事案に関連した一般的な情報であり、申出内容に対する調査結果や回答ではありません。

身の回りの潜在危険を事故にしないために

消費者安全調査委員会
委員長代理 松岡猛



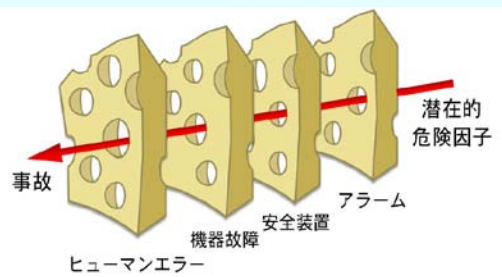
消費者安全調査委員会では、個々の事故調査を通じて安全を実現するために、製造者、販売業者、保守管理者など様々な関係者がいかなる役割を果たすべきかを考えています。そして、そこでは消費者の役割も重要となってきますので、今回のコラムでは、消費者の役割について考えてみました。

日々、非常に多種多様な消費者事故の実例を目にしていると、私たちの身の回りには多くの危険が潜んでいると、いまさらながら実感させられています。ところが、大多数の人々は報道されるような事故に実際には遭っていないのではないのでしょうか。

20世紀前半にアメリカの労働災害を統計的に調べた結果、有名なハインリッヒの法則が得られています。重傷の災害、軽傷の災害、ヒヤリハットした傷害のない災害の比が1:29:300となっているという法則です。最近東京農工大学の永井正夫先生のグループが自動車のドライブレコーダの分析から、死者数、死傷者数、物損数、ヒヤリハット数の比が1:200:2,000:100,000となっている法則を見出しています。つまり、事故に遭ったことはなくてもヒヤリとした経験は皆さんお持ちではないのでしょうか。

事故は複数の条件が重なって発生する 경우가ほとんどです。不運が重なって事故が発生するという考えが、英国のリーズンによりスイスチーズモデルとして提唱されています。

ヒヤリハットとしては、例えば次ページのようなケースが考えられます。これらのケースでみられるように、事故の発生の条件をどこかで断ち切れれば事故に遭わずに済みます。そのためには、まずは日常における注意が肝要です。



しかし、注意が肝要と意識しているにもかかわらず、事故条件を揃えてしまっていることはないのでしょうか。パソコンで作業をしていてダイアログボックスが出て分かりにくい説明とともにOKを押すことを強要される。OKを押さない限り次のステップに進めない。次々とOKを押していったところ、“ファイルの喪失”、“誤発注”、“パソコンのシステム状態変更”等の一種の事故発生となってしまったという経験はないのでしょうか。

最近の製品は、安全のために種々の工夫がなされていて、設計者が想定する使い方をしていればまず事故は起こらないようになっています。しかし、取扱説明書を読まない、消費者側の常識に頼って、類似品ではこのように使っていて問題なかった、この使い方は便利だ・・・このようなことをしてはいませんか。もしかしたら、危ない崖の縁をふらふらと歩いていて運よく落ちていない状態なのかも知れません。

よく分からず誤った使い方をしてしまう。極端な場合、“非常識な”、といっても設計者から見て非常識なだけですが、その非常識な使い方をしている。これらが原因で事故になっている例が少なからず見られます。この場合安全のための工夫はいともたやすく破られてしまっています。

よく分からず誤った使い方をしてしまう。極端な場合、“非常識な”、といっても設計者から見て非常識なだけですが、その非常識な使い方をしている。これらが原因で事故になっている例が少なからず見られます。この場合安全のための工夫はいともたやすく破られてしまっています。

身の回りの潜在危険を事故にしないために

新製品や使ったことのない製品の場合は十分に取扱説明書を読むことが大事です。これは大変面倒なことですが、大事な情報を得ることとなり、ひいては安全が得られるわけです。情報は身近な人、インターネット、あるいはTV・新聞等のマスコミ、消費者庁のお知らせからも得られますが、いかに危険に対するアンテナを張っておくかが大事なこととなります。

人類は言葉・文字という手段で知識を個人・世代を超えて伝えることにより進歩してきたといえます。私たち消費者自身の安全のために、消費者相互でも安全についての知識を充実・共有し、社会の安全文化を醸成していくことが大事でしょう。

ヒヤリハットの例

- ① マンションの立体駐車場から車を出そうとしたところ、前方の地面が上がって行く。おや、故障でパレットが下がっているかと思い、ドアを開け車から出ようとしたが、思いとどまりクラクションを鳴らした。パレットの下降が止まったので、窓を開け「誰かいますか」と叫ぶと、「すいません間違えました」との声が聞こえた。その後、パレットを元の位置に戻してもらい無事外出できた。

かなり危ないヒヤリハット事例ですね。後から来た住人が隣のパレットを操作するつもりでたまたま間違えたことが原因でした。もし、車をもう少し早く出していたら、あるいはドアを開け外に出てしまっていたら、あわててしまいパレットを元の位置に戻すとき間違いを起したら事故になっていたことでしょう。後から来た人が間違えたのも、急いでいた、操作ボタンの配置が混同しやすい、等の要因も考えられますし、安全装置が十分であったかどうかの疑問もあります。

- ② デジタルメディアプレーヤーで映画を見ていて、ついうとうとしてしまった。ハットしたら持っていた手のひらが熱くなっていたので慌てて離れた。

ヒヤリハットの事例です。この機器の発熱量が多かったことが主原因でしょうが、映画でなく音楽を聴いていたのでしたら熱くなることはなかったでしょう。短い動画をみていたのでしたらうとうとしている間に終了していたでしょう。うとうとしたのはここしばらく仕事が集中し疲れていたこともあるのでしょう。

- ③ 踏切を車で横断しようとしていました。踏切の向こう側に車一台分のスペースがあることを確認して踏切内に入り向こう側に出ようとしていました。そのとき車の前方をショッピングカートを押して歩いていた高齢者が止まって動かなくなりました。時を同じくして警報機が鳴り始め遮断器が降り始めた。たまたま向こう側にいた男性が高齢者を助け踏み切りの外へ出たので、車を踏切から間一髪で出すことができた。車の後部の塗装が遮断器の棒により剥がれただけですんだ。

これは、事故の一手手前の事例ですね。まず車の前方にいた高齢者により何が起こり得るかを推察できなかったこと、高齢者が踏切の段差に足を取られ動けなくなった事、直ぐに列車が近づいてきたこと、後方が詰まっていたことが不運でしたが、向こう側に機転の利く男性がいたことにより事故の発生を防いでくれました。